

☆わたしの意見

神戸、この素晴らしいふるさとを

荒川克郎

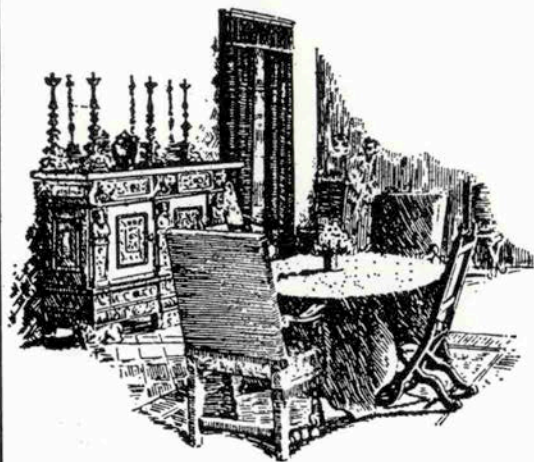
〈神戸新聞編集局長〉



午前零時、停泊している内外大小さまざまな船が一夜に汽笛を鳴らして国際都市神戸の新年は静かに海から明けて行く。その低く力強いボーッとという協和音が坂をのぼり、平野の「祥福寺」や摩耶山の「切利天上寺」のゴロンオンという除夜の鐘と絶妙のハーモニーを響かせて背山にこだまするころ、神戸っ子たちは「楠公さん」や「生田さん」「長田神社」に初詣して明るい年詞を交わす。新旧の不思議な調和、神戸ならではの素晴らしい迎春シンフォニーである。

三カ日が過ぎて四日を迎える。港は一転、静から動へたくましい活動を開始し、刺激されるように陸上では威勢のいい初荷の車が疾走しはじめる。人々は「今年も平和で豊かな一年でありますように」と念じながら生活のリズムを奏でる。神戸っ子は開放的で屈託がない。だから『今年がポスト日中の曲がりかどを回って内外ともに未知の領域に挑む年であり、外交面でも内政面でも、精神的にも物質的にも本当の「日本改造」が可能かどうか。既成概念を越えて賢明に対処できるかどうかの年だ』といっても別に驚くようなことはない。神戸港の水は七つの海に通じている。世界の鼓動は神戸っ子の鼓動でもある。スマートなコスモポリタン神戸っ子は主体性の塊りだ。これをはぐくみ育てたもの——いうまでもない「ふるさと神戸」だ。このごろ「ふるさと指向の時代」と盛んにいうようになったが、神戸っ子にとってこんな言葉はマスコミの増幅作用ぐらいいにしか響かない。しかし神戸っ子は考える。「ふるさと神戸」は今まで神戸っ子を育ててくれたが、そろそろ本気になって今度は自分たちが新しいよりよい「ふるさと神戸」づくりに取り出す番だな」と。「ふるさと」は幾つになっても「おふくろ」みたいなものだ。しつとりとして、おおらかで、やさしく温かいもの——神戸っ子たちのかけがえない「ふるさと」。新しい神戸は市長の宮崎さんがうたい上げた「人間環境都市宣言」にうまく集約されている。実現めざして神戸っ子諸公、一つの輪になろうではないですか。

謹 賀 新 年



設計・創作

永田良介商店

神戸市生田区三宮町3丁目 大丸前 TEL 神戸(391)3737
(代表)

東京店・東急百貨店 {日本橋店内6階 TEL 03(221)0511
本店(渋谷)7階 TEL 03(462)3180

工場 神戸市垂水区多聞町小東山975-35
神戸木工センター TEL (078) 706-5005 (代)

賀 正



北 村 真 珠 店

元町通2丁目60 TEL.331-0072

随想三題



書／広津雲仙

たわごと

広津 雲仙

（書家・中京大教授）



筆で書^とくのが本職で活字になる文章は苦手、何か随筆を送れるとの注文にとまどっている。

四十数年、「筆にあげて筆に暮れ」というと、ちと大袈裟になるが、サラリーマンと二足の草鞋を履いて半生を過したのである。神戸に住みついて三十八年、会社を退いて十一年、大阪通いだっただけに神戸にゆかりのことを書かされるのは無理を承知で書くことにした文化不毛の汚名を神戸はなぜ頂

くのだろうか。平清盛の頃から和田岬の港が作られ、江戸末期には貿易港として日本の窓口として繁栄したのである。商業優先か、なるほど、貿易は盛んであり国際都市として栄えて来たし又これからも栄えるにちがいない。ところが文化、芸術の面は何かおきざりにされている感が深い、例えば先ず美術館らしいものがない、先年やつと県立の美術館が出来た。しかしこれとても規模は極めて小さい。しかも近代美術館にしては大衆になじまないようなところもある。

神戸市はなぜもっと文化活動をし市民の情操教育をやらないのかと常日頃思うのである。大都市なるが故に仕事は数限りないとは思ふ。しかしそれとこれとは別に考えて欲しいのである。

この間神戸市勤労者美術展なるものを見た。絵画、写真、書道の

三部門である、その会場が「さんちかギャラリー」である。大変失礼だが極めてチャチャといわざるをえない。いやしくも市が主催するのなら、もう少しなんとかならぬものかと思った。もちろん主旨は勤労者を対象としてあるので限られるかも知れない。

それでも市長さんはわざわざご出席になり賞状の授与式があった。これが二十数年続いているとかで、その進歩の遅々たるには驚かざるをえないのである。

何かもっと強力に文化面の施策にと願わざるをえなかった。何だか作家が住みにくい環境に置かれているかに錯覚さえ感ずるのである。その証拠に有名作家が少ない。皆が中央へ出て活動する、といった具合、ただし書道においてはついでこの間芸術院会員になられた、安東聖空先生を初め先覚者があふり、日本的な書道を主体に、漢字、前衛と盛んな土地である。

いささかわが田に水を引くようであるが、戦前からこのような先覚者によって書道兵庫の名を天下にほしいままにしたのである。戦後いち早く神戸を中心に書道協会なるものを設立し、神戸新聞社の後援を得て作家自体の切磋琢磨の場としての活動が実を結んだといえると思う。書道人口はますます増加している、実はこれらの作品

を陳列する場所がなく、近代美術館で二回、三回と分割陳列のやむなきありさまである。

このような状態を早く解決して頂きたいものであると痛切に思う。前述の勤労者美術展しかり、もっと市民が美意識を燃やし、豊かな生活と、うるおいのある情操教育の出来る場が欲しいのである。

上野の美術館での日展など門前「市」をなとすといった表現がびつたりするような行列である、神戸っ子にもあんな情景が欲しいなあ、と思うのはあながち私一人ではないようだ。

三宮センター街は流行の先端をゆくとか。なるほど、それも結構人心の安らぎに情操教育の強化が望まれる神戸市ではないか？

神戸を愛する一人のぐちかも知れない。

正月の民俗

加藤 隆久

〈生田神社宮司〉



正月いうたら ええもんや
雪より白いママ食べて

割木のようなどとそえて

おかん(母) おとったん(父)

でに(銭) おくれ

何買うのともしち買うて館あねこうて

おかんのかアみ にちやくちや

「兵庫のわらべうた」より

昔はこんなわらべうたがはやった。しかし、今の物のあり余った豊かな時代の現代っ子には、こうしたわらべうたもピンとこないであろう。日本列島が次第に近代化都市化されていくにしたがって、日本全国の正月行事としての古い習俗や風習もだんだん影をひそめて行くのに何ともさびしい気がする。

私は数年前から神戸における正月の習俗を調べているが、神戸にも、兵庫の旧家や花隈などには、いまだにおもしろい正月の習俗が残っているのはうれしいことである。

正月になると、兵庫の旧家では歳徳棚としとくだなというものを飾る。これは歳徳の神をまつる棚で、どの方向へも回転できるように作られている。歳徳神とは、正月の一定期間家々にまつる神で、正月さま、年神さんともいわれ、一年中の万徳を司る神であり、また穀物の守護神とされている。本居宣長は歳

(年)すなわちイネの守護神が歳徳神であることを示唆しており、柳田国男も一年のはじめに家々を訪ねて子孫のまつりを受け、イネの豊作を約束する祖先神であることを説いている。つまり、年の始めにイネやその他の財物をたずさえて来る祖先神のことをいうのであろう。

この歳徳は「あき」の方角にあり、恵方めぐほうともいわれ、その年々によって方角を異にしている。今年の恵方は巳午みづなの間で、南南東の方角である。

この棚にはシメ縄を飾り、もち洗米、酒、塩などを供え、その年の「あき」の方へ回転しておき、この方角の神まいりが、いわゆる「恵方まいり」といわれるものである。恵方の社寺には幸運を求めてたくさんの人達が参詣する。今年でも兵庫の網谷家などでは、この棚をまつって正月を迎えている。

昔、兵庫の神田兵右衛門さんの家の歳徳棚は一・二メートルくらいの長方形の大きな棚で、天井からつるされ、奥の正面には神像がまつられ、奥の正面には神像がまつられ、その前の真中に櫓を立てゴボウシメ縄を飾って、四方にサカキ、ユズリハを置いて塩もちを供えたそうである。

ところで、旧習を守る花隈のきれいどころにも興味ある風習があ

る。花隈では、除夜の鐘の鳴る少し前、神棚や仏壇に灯明をあげ、恵方の方を向いて願いごとを念じながら年越しそばを食べる。そばを食べ終るや、いっさい物を言わずに石の鳥居のある神社へ無言の初まいるをする。

まず、生田神社をかわきりに、三宮、湊川、七宮、柳原蛭子、長田、八宮の七社を巡拝する。この無言まいるは三年つづけないとご利益がないといわれている。今ではタクシーで巡拝しているが、一番困るのは運転手に物の言えないことだそうである。

ともあれ、このエキゾチックでハイカラな神戸の町にも、こうした日本古来のゆかしい民俗が残っているのはうれしいことである。

はなのすきなうし

平松 治子

〈青玄俳句会同人〉



「鼻寄せくる 乳足りの仔牛

無人卿」去る五月、俳句と写真取材のため五島列島を周遊した青玄主幹伊丹三樹彦の作品。韓国も真

近い朝鮮海峡の怒濤を真下に見る崖つづきの牧場。都会好きの若者に去られたおきまりの過疎地。午後の陽を浴び勿体ないような広さの土地を独占してちよつと尾を振ってみせたりする仔牛。でもいくら満腹といってもこう人っ子ひとりいないのではやっぱり淋しいらしくカメラをいくつもぶら下げ時々メモなど取ってる風変わりなおじさんにでも親しみをこめてすり寄ってくるのも無理からぬこと。

「特急と行き交う牛の眼 ぬく寒く」(治子) ことほど左様に私達の住む都会の周辺では殆んど見られなくなった牛。最近貨車の牛ともすれちがうのは稀です。

勝手の違った場所です戸惑いつつもこちらからの凝視を知ってか知らずか何とも言えぬ柔和な親しみをこめたまなざしがいつも心に灼きつくのです。いかに人類の発展へ貢献するためとはいえ彼をあんな状態にはめこむのはとても後めたい思いに駆られます。でもずっと前、山を崩した赤土をのせた荷車を引きつつ何度も鞭打たれていた牛の眼も幼な心に忘れられませんが、ダンブのお蔭で彼にも解放時代が訪れたというべきでしょうか「発情の牛呼ぶ 腰板 手で打って」(藤井美智男) 三木市郊外から神戸へ通勤。——のっけから特異な対象で読者の興味を誘発。

〈腰板 手で打って〉は牛と飼主との最高の愛情伝達を示す——という伊丹三樹彦の推薦句。牛と暮しを共にするのは傍で見える程決して楽ではなく大へんなことでしょうが、殺伐とした都会の箱のような住まいで退屈しているよりは、動物とも心を通じ合えるような人間味豊かな生活になるべく続けてほしいと願わずにはいられません。

「諸んずる童話 しぐれる闘牛場」(治子) 日本の牛に比べてスペインの牛は全く気の毒です。いかに見世物とはいえ残酷そのもので、例えば昔の日本髪にさされたかんざしのようにあらかじめ牛の背中に一メートル弱の槍を四、五本突きさし既に血が噴いている処へかっこいい闘牛士が最後の止どめだけ差すという次第で人間の卑劣さを丸出し。ああいうことに熱狂する西欧人と日本人のちがいは或いは伝統的な食物の關係ではないかと思ったり——ひっそり牧場で暮したいフェルジナンドという「花の好きな牛」の物語ばかり思い浮び時雨を幸い早々に闘牛場を引き上げました。しかし闘牛士の美男ぶり、夜のフラメンコの黒眼、黒髪の美女ぶりは三年経った今も鮮やかに思い出されます。

さて丑年に当り、ねばり強く着実にベースを調えて自分の勉強に励む決心です。

毎月一回の写生会を行なっている美人画を描く集い、明美会。

中心になっておられる寺島紫明先生の「明」をいただき、「美」は、美人画の集い、または美しい集いの意をこめて名称をつけたという。

この会の歴史は古く、発生した

ある集いその足あと ★ 「明 美 会」



毎年十一月に神戸に於て、作品発表の展覧会を催すのが恒例となつた。

会を重ねるうちに、会員はだんだんにふえ、その上、お弟子さんのお弟子さんも加わることになり、明美会はいよいよ充実していった

そこで、会員が集まって写生会

をするという方法がとられるようになったのは昭和三十六年からである。

毎月諏訪山会館でモデルをつかって始めていった油絵でのやり方と同じように、

スケッチをしたりクロッキーをしたり。同年には、初めて神戸を離れて大阪のそごう百貨店二階ホールでの展覧会も試みたという。

三十七年からの三年間には、五月と十一月に年に二度の展覧会を開くという意欲的な活動も続けられた。が、その後一時、作品発表を休むということもあった。四三

年の第十五回展のあと、十六回展まで三年間のブランクがある。常展会場にしてきた元町のちぐさや画廊が閉じられたための休止であったとか。十六回展はセンター街、錦画廊のこけら落しの際に開催。以来、錦画廊を常展会場にして、毎年の例会が再開された。

このような歴史を持つ明美会も現在メンバーは四〇名。一同が集まって描くことが不可能な状態になり、月に四、五日の練習日を決めて、いくつかのグループに分かれての作品研究会になっている。メンバーは、それぞれかなりのキャリアを持つ人が多く、画家としてその道で活躍している方も数名ある。学生や和服のよく似合う奥様達が、静かな教室でスケッチをとる鉛筆を走らせている。

今ひとつ残念なことに、寺島紫明先生が、病氣療養中で会においでになれないことがある。完成した作品を持って批評をいただきに訪ねることにしているとか。一日も早い御回復がメンバーの望みであるのはいうまでもない。

写生会にお見えになる日が待たれる。神戸には少ない日本画の活動の一つとして、また、一番古い歴史をもつ会でもあること、ユニークなものにしていきたいと、紫明先生、メンバーともに意を合わせて張切っている。

のは昭和三二年のこと。当時は、個々で描いたものを集めて、年に一度の発表の場を持つ、という会のあり方だった。寺島紫明先生を慕って集まっていたメンバーは十名。画家や学校の教師、サラリーマン等。

第一回の展覧会は、三二年十一月、元町ちぐさや画廊にて。以後

1973年

謹賀新年



●すべての服装計画を可能にする

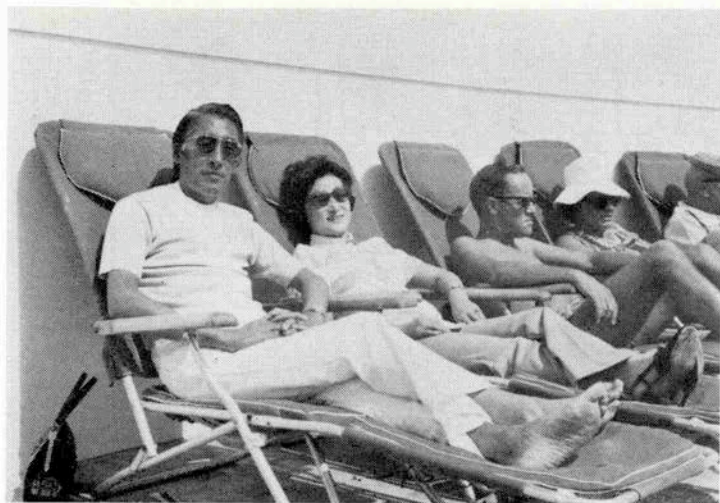
San Sakae

MOTOMACHI-2・KOBE・TEL 331-5121～2
SHINSAIBASHI-2・OSAKA・TEL 213-3378
LADIE'S・MOTOMACHI-1・KOBE・TEL 331-7885

□ずいそう□

キャンベラの船旅

楠本 憲吉〈俳人〉



キャンベラ号のデッキで 左筆者夫妻

私は今年（昭和47年）は珍しく海外へ出ることも多い年であった。

そのうち船旅を四回もやった。

はじめて船旅を味わったのはそう古いことではない。しかし一度、そのよろしさを満喫するとすっかりその醍醐味に魅せられてしまう。

いわゆる船キチにされてしまう。

プールから映画館、ショッピングセンター、銀行まで備えた「動くホテル」とでもいうべき船旅ののんびりムードを知った人にとって、たとえジャンボ・ジェットットのファーストクラスであっても航空機の旅などちゃんちゃらおかしくってということになる。

船旅は「高速時代への反逆」といわれているが、むしろ船旅は現代における最高のゼイタクだといえよう。

つまり航空機によるのは「旅行」で、船のそれは「旅」といえよう。そこに豊かな旅という名の生活が展開するからである。

ところで日本の船キチにとってあこがれの船のひとつにキャンベラ号がある。

キャンベラ号は英国P&O社の豪華観光船で総トン数四五、七三二トン、全長約二七二m、巾三三m、巡行速度二七・五ノット。船内には、客室レストラン、クラブ、バー、ゲーム場、プール、ダンスフロアー、映画館、理容室、美容室、郵便局、診療所、ランドリーサービス、銀行とあって各デッキはエレベーターを使って昇降する。

キャンベラ号は、ややオーバーないいかたかもしれないが、動くホテルというよりは、「動く一つの小さな町」といえないこともない。

このキャンペラ号は、今回の日本への寄港を最後、今後ニューヨークを拠点にしたカリブ海のクルーズ船にヘンシンしてしまうのである。

だからキャンペラ号の来日は今度が最後ということになる。

そこへ「ビーブル友の会」という会から、キャンペラ号に乗ってみませんかという誘いを受けた。渡りに船とはこのことで、一も二もなくOKを出した。

日程は十月二十八日、神戸第四突堤ポートターミナル十九時乗船。二十九日七時出港。三十日八時長崎着、十九時長崎発。三十一日は東シナ海をひた走り、十一月一日香港着。十一月四日十五時五十分のJALで空路福岡というまことに手頃なスケジュールである。

そしてこの船には、豪州や英国、それに横浜、神戸で乗り込んだ日本人約二百名を含めて二千二百五十人が乗っている。十月十三日シドニーを出港、ラバウル、横浜を経て神戸に至り、長崎、香港に寄港の上、シドニーを経て終着港英国サザンプトンへは十二月十三日という長旅である。

ポートターミナルに横づけになっているキャンペラ号を見て驚いた。さすがに大きい。

キャビンに荷物を放り込んで、この「動く船」の探訪に出てみると、ばったり、ひとりの美しい女性から声をかけられた。

「私、遠藤周作さん、よう知っとなのよ」

と神戸弁である。

「神戸の方ですね」

という、

「そうです」

とニツコリ。孔雀のような感じの女性である。

そしてあとで自分の部屋へ遊びに来ないかといわれる。神戸新聞の方たちも二、三見えるとのこと。部屋で着替えて彼女のキャビンへ行くと、お客さんお二人はもう見えていた。彼女はキャンペラに関する限りなかなかの情報通。

この船には、もとオーストラリアの有名なジョッキーが乗船しており、そのひとは船が神戸へ着いても横浜へ着いても自分の船室を一步も出ず、朝からウイスキーを飲み、酒びたりの船旅を楽しんでいるとのこと。

この船のファーストクラスは老外人夫婦が多くなるで、「恍惚旅行」でつまらない。エコノミークラスの方がヤングが多くずっと面白い。バーもゴーグクラブもあって、お値段はファーストより格安。

ファーストとエコノミーは嚴重に仕切られているが、ファーストからエコノミーへ行く秘密の通路がひとつだけあるのを彼女は発見した。よろしければ今晚でもエコノミーのバーをご案内してもよいとのこと。もとより異論のあるはずはない。では夕食後八時にファーストのメインバーでお目にかかりましょうと約束したら、彼女は再び孔雀のように羽をひろげて立ち上り

「ほんなら、今晚ね」

とあでやかに笑って我々を送り出した。

私はまるで白昼夢を見ているような思いでわがキャビンに戻り、ゆるやかなエンジンの軽い揺れに身を重ねながら、今度の船旅は楽しくなりそうだなアとポケーツと考えていたのであった。

抜錨はつびようや僕に挙手きしりする波がしら

憲吉

□れんさい随想〈1〉

ブラジル

無宿

津高和一

〈画家・大阪芸術大学教授〉

僕が始めてブラジルに渡ったのは一九五九年だから、ちょうどいまから十五年前である。そのときは移民船の『あるぜんちな丸』で、ブラジルへ移住する人々と同船だった。

太平洋北方の大圏コースから南下して、パナマ運河を通して大西洋を南進する四十五日の船旅だった。僕にしても始めての海外旅行ということ



であつたが、同船する移住者たちの縁者たちの見送りで岸壁は盛大を極めた。

今生最後の別離ということもあつて、舷側と岸壁の間では五色のテープが乱舞していた。

甲板で立っている僕の横で、老母がしきりに涙をふいていた情景を、あのときのことを回想するたびにいつも思い出す。涙雨というのだろう、移

民船の出帆にはきまって雨が降るんです、と船員が後で話していたとおりにあの時も七月の豪雨がやってきた。

雷鳴をともなう暗たんとした空模様だったが、それが移住者たちの苦難の前途を暗示しているかのようでもあった。

現在ではその移住船の定期便もなくなり、神戸の諏訪山下にあった移民収容所（その後移住幹旋所と改名した）も閉鎖していまは建物も新しく塗り変わりこの建造物は別の用途に使用されている石川達三の小説『蒼氓』の舞台の一端でもあったがすでに歴史の流れの中で埋没してしまっていた。当時、サンパウロ、ビエンナーレの日本側出品作家代表という名目で僕は渡航したのであるが普通では複雑だった当時の旅券交付も、そのために簡単に入手できたのである。旅費等は自己負担だった。これも八方破れと、いつもの無手勝流でなんとか工面したのである。

元米、呑気そうな僕も、その実内心は呑気ではありえなかったのである。だが、なんとかなるのではないか、という願望に似た変な可能性のようなものが実現するのではないかとこの予見をもっていた。いまからおもうと無茶な話だった。神戸元町の千軒屋画廊での個展収益が大半のあてだったのである。

もともと僕は絵を売ることにかけては苦手中の苦手でもあった。そのずっと以前にも絵を買おうといってくれた人を信用し、訪問したがその人々の社交辞令であったのか、また何かの都合であったのか結局全部駄目だったことがあった。以来、僕は自分から自分の絵を買ってほしいという

ことを今後絶対にいわないことをかたく心にきめていたからである。

これは現在も依然として持続していることだが、当時としてはなんとかならないと実現不可能で万事休したのである。それがどうにか片道旅費、きち、ちの状態にまで漕ぎ着けたのだから、無暴な冒険であると同時に、賭けのようなものだったのである。

そのようにしてブラジルに渡ったわけだったがその前々年にも作品がビエンナーレに選出され出品していたこともあって、僕としては長旅の船中を利用して作品を作り、事情が許せば南米各地で個展開催をしてやろうというコンタン、だった。ところがその計画も結果は見事に不発に終わった。ということは、巨大で安定しているとおもった『あるぜんちな丸』も船内ではかすかなエンヂンの微動が意外に邪魔になり創作などとうてい無理だった思考をまとめるとか、イメージの展開を期待することなども無理だった。キャンパスは張ったものの何一つとして作品も出来ず、凝固もしないままに過ぎてしまったのである。

人間、ものごとにはじかに直面してみないと解らないもので、赤道も過ぎ目的地との距離もだんだん短縮してくる頃になって、どうにでもなれ、とその創作行為を中止してしまった。

だが、またそれはその時で、さっぱりとしたもの気持ちを取り戻せたのだから、面白いものである。このようにして、リオ・デ・ジャネイロ港に着き、目的のサントスの最終港に到着上陸して、以後ブラジル無宿者の第一歩がいよいよ始まったというわけであった。

□ インタビュー

安東聖空氏〈芸術院会員〉をたづねて

かな人生



昨年暮れ芸術院会員になり、正筆会会長として、日本の古典版名、上代様に着眼し、その再興と普及に貢献している安東聖空氏。明治二十六年赤穂生れ。その老練な筆致、しなやかな墨跡は、安東聖空氏の人徳とその人を語る。県立第一高女の教師を一九年。その後書一筋の人生だ。多忙の折、東京から神戸に帰って来られた翌日、垂水の閑静な安東邸をたづねた。

——先生は神戸へはいつおいでになったのですか。

安東 私は、今の赤穂市で生れたのですが、神戸へ出てきて尻池の方の小学校や須佐小学校に三年勤め、明治三十三年に県一高女ができて、そこで習字の先生として十九年勤務しました。新旧交代の時期で女の先生の權威が強くて今から思うと冷汗をかくようなことをよくしました。生徒にも毎日練習させ、名簿に付けるものだから、当時は生徒にも恨まれるし、父兄からも苦状がくるほどのスパルタ教育でしたが、卒業してからはいろいろな面で喜ばれました。やはり上手になりましたからね。

垂水に在住するようになったのは大正十二年からですが、当時は縁側に鶯、路上に赤とんぼ、夜は蛙がうるさいくらいいたのですが今考えると大変な違いです。県

一高女をやめた後は、書一筋でルンペンですよ(笑)。困ったのは戦時中で本当に生活に困りました。書だけでよくやく忍んできたという状態でした。戦時中のことと比べるのもおかしいですが、私の思うのに、文明文明といっているのは消費文明で、建設というものでなく物を作って使い捨てるというのが現在です。どちらがいいのか一言で言えないけれど。昭和三十三年に書道をやっている者が中国から招待を受けて行ったんですが、さすが中国はやっていると思いました。北京の十三陵という所で働いている人や、広東で水上生活をしている若い青年に会った時、自分達の労働は子孫のためだというんですね。国民は皆そう考えて仕事しているんです。それに向うには莫大な地下資源もあるし、国民のあり方、日本のあり方を考えさせられました。四十日間いた訳ですが、毛沢東の力は偉大ですね。

——書は、どなたがお好きですか。

安東 平安時代の紀貫之、藤原行成の書いたと伝わる古典版名ですね。

これだと気付き決めたのは、帝室の御物で藤原行成の和漢朗詠集です。当時この本が二十円で四苦八苦して搜



垂水の閑静な安東氏自庭にて

し出したんですが、お金が無くて、結局、漢方という新聞でモスリンの標語に応募したのが五等になってその賞金二十円で買ったんです。それから和漢朗詠集、首っ引きで独学して学びました。苦勞しました。平仮名の「い

ろは」、自分の基礎を作るために朗詠集の中から例えば「い」の字を集め、標準の字を決め、一万遍書きました。この一字一万遍を実施しようと思ったのは、ある婦人雑誌で、上野音楽学校のお琴のお師匠さんの一曲一万遍というのを読んだ時です。そうすると松風を聞いて琴を合

わせると琴が唸り出すというんです。私も一字一万遍と思ったのが、この世界に入った第一の出発です。人間というものは、これという基礎を身に付け、しっかりしたものを持っていけば、本当にそれだけでいいんです。

今まで書道をしていて悟ったことは、人生に関わりをつければ、瞬間決定が一番大切だということです。私達が筆に墨をつけ紙におろす、その瞬間がもうすでに決定になっている訳です。間違いの無い決定をするためにはやはり基礎がなくてはならない。そういうことを上代様の姿を持ってやっている訳です。仮名は複雑な漢字に比べると簡素です。複雑なものを簡素化したのだから、そこは余白となって残る訳ですが、この余白の世界は実に

素晴らしいと思います。この日本の精神文化・余白の世界を日本人は大切にしないではいけないと思います。

もう一つ書をやっていると感じることは、人生には遊びがなくてはならないということです。まわりにも計算された利益得色とは全く無関係な遊び。遊びというのは、人間の心の最高の状態だと思います。私の書道も遊べるようになったのはここ二十年程ですが、それまでは飯の種で。(笑)、展覧会の作品を創作するとなるとやはり遊びではなくなるし、墨をするにも濃くしようと思ってしまう。もう遊びではなくなる訳です。目的の無い遊び。それが人生には必要ですね。ただ遊びにも秩序は必要ですが——これからなりたいことは。

安東 見事な字というのは、私の理想では自分の心が素晴しくなって、書いた書の中に誰でもが読みとれる文字であればいいと思っています。私は書は文字+Xだと思っています。文字は現在の誰にでも読める字、Xは心です。その他、表音文字の宿命である目立つ縦の線を、目立たないようにするために仮名の構成を持っていくなか、その仮名を現代風の横書きにするにはどうすればいいかということなどが、私の今後の課題ですね。

おんがら屋



きものと細貨

おんがら屋

神戸

西店/三宮センター街・電話 331-8836(代)

東店/三宮センター街・電話 331-0629

三宮店/さんちかタウン・電話 391-4303

東京

銀座コア店/4階着物コア・電話573-5298(代)

渋谷東急店/5階和装名家街・電話462-3409(直)

日本橋東急店/4階和装名家街・電話211-0511(代)
(内線294)

池袋パルコ店/4階着物小路・電話987-0561(直)

あけまして
おめでとう
ございます

'73. 1. 1.



本年も〈おくりもの〉には
〈赤・白・黒〉のユーハイムを宣しく
お願い申し上げます。

ドイツ菓子

Facheim's

ユーハイム

本店 三宮生田神社前

TEL (331) 1694

三宮店 三宮大丸前旧市電筋

TEL (331) 2101

さんちか店 三地下

スイーツタウン

TEL (391) 3539

心斎橋店

TEL 06 (252) 0925

☆新春神戸っ子対談

神戸を住みよい街に

宮崎 辰雄〈神戸市長〉

陳 舜臣〈作家〉



新春の抱負を語る宮崎市長と陳舜臣氏

★神戸の良い環境づくりが今年の課題

陳 まず最初に今年の神戸市政に対する市長さんの抱負といったものをお聞かせいただけませんか。

市長 この前、神戸を人間環境都市にするという宣言をしたのですが、その裏づけとして市民の環境を守る条例というのをつくったわけです。この条例を一つの軸にして神戸の良い環境づくりに今年一年間全力をそそぐと、思っております。

環境づくりには三つありましてね。一つには生活環境それから、自然環境と文化環境のこの三つがあって、まず生活環境の中には従来の都市問題といわれるものがほとんど入ってくるわけです。たとえば上、下水道の問題にしても、住宅の問題にしても、ゴミや防災にしてもみなその中に入ってきますので都市問題の解決と同じだと考えていいんじゃないかと思っています。

自然環境の保存については、一番の中心は緑化問題だと思うんです。ですから今グリーン作戦をやっているんですがこれを一層強化したいと思っています。それと同時に自然環境の中には山の防災なんかも入ると思っていますし、公園なんかの整備も進めていきたいと思っています。

次に文化環境の問題ですが、文化政策というのは実際上それを進めていくこと自身に意味があるんですけれども、我々行政機関は一つの指導方針などを示してやる



宮崎辰雄神戸市長

どを見ますと、古文化財というのはその国民の誇りを非常に高めますので私は今回はひとつ大がかりに市内域内の埋蔵文化財等の調査をして、保存すべき地域というのは保存する、記録にとどめる範囲でいいものは記録にとどめる、といった見通しを今年はいっかかりつけてみたいと思っています。

具体的には公会堂ができると同時に、あの神戸駅から公会堂までの湊川神社の西の筋を彫刻通りにする。それからその突きあたりが公会堂の壁になるので、これには

「智恵子の切り紙」つまり、高村光太郎の奥さんの智恵子夫人の切り紙のうち「アジサイ」の切り紙を壁面にモザイクで出すようなことを考えているんです。

陳 そうですか。それは何色ですか。

市長 色は地がうすいピンクにちょっと近いような色です。それから鉢があって、それは黄色がかった色です。花自身は青い色です。神戸の花市をアジサイにしていますのでアジサイの壁面を出したいと思っています。

陳 それはいいですね。

市長 彫刻通りの彫刻についてはこれからだんだん増やしていくわけですが、この前ビエンナーレを須磨離宮公園で開きましたね。あの時に今度の彫刻はモニュメンタルなものを中心にしてやるということにしました。そういう記念になるようなものを作って、それを彫刻通りにもっていったて配列したいのと、公会堂の前のロータリーなんかには萩原さんの裸婦を配したいと思っています。

それから古文化財の保存については、住宅などの宅地開発で古文化財が壊されたりするようなことが多いですね。この間の高松塚古墳の発掘とか中国の長沙の古墳な

ものではないので、文化の環境面、これは主として施設の面、あるいは古文化の保存という面に力を入れ、文化事業の内容自体はやはりそれぞれの個人のあるいはグループの独立性といったものを出して進んでもらう筋合いのものだと、思います。文化環境づくりとしては今年の九月にいいよ中央公会堂ができあがります。この市民ホールの大ホールと中ホール、それに昨年改造してつくった小ホールの三つを軸にしていろんな芸術活動や、集いを育てていきたいと思っています。それと同時に市でやれる文化活動はもうそろそろやります。たとえば今年の一月から南蛮美術をアメリカへ出すことにしまして、一月からニューヨークを初めてとして三都市で南蛮美術の展示をやりますが、こういったことも文化活動の一環としてやっていきたいと思っています。

さらに中心街の改造計画を進めるにあたって、たとえば東の方では国鉄六甲道の南側に市街地改造事業をやっていますが、あそこひとつ「勤労者福祉センター」を設けたいと思っています。今、兵庫駅前の大きな建物が入りかかっていますが、あの中にも勤労者福祉センターを入れてるんです。神戸駅前には神戸駅からメトロ神戸まで地下商店街をつくることにしました。新長田駅前にも23階建てのビルを造る予定で、これは今年の三月には着工できる予定です。このビルの中には文化活動のできる場やいろんなものを造る計画ですが、いろんなものを集めてくると人も集ってくるようになるでしょう。

陳 神戸は長い町ですから、三の宮だけが中心だというのはどうも淋しい気がしますからね。

市長 我々としてはいつも三の宮中心ということになりがちだという批判もありますし、都心というものはできるだけ分散させようと思って、神戸駅、新長田、六甲道というものを副都心にして、その駅舎の改築もやって

みたいと思っています。

陳 今度大倉山に文化ホールができれば、運営の仕方によつてはかなりの吸引力をもってくるんじゃないですか

市長 ええ。そのためにはみんながそのホールに馴染みをもつということが大切なので、今度竣工したら10日間ほど無料開放してみんなに魅力のある催し物をするつもりです。回りの環境もきれいに整備して、気軽に散歩やデートしてもらえようにしたいんです。そうすると三の宮との間の散歩といったことも起こってくると思うんです。昔の元ブラのようなね。

陳 そうですね。そのぐらいいは歩かなくては。週二日休みというようになれば歩く時間ができてきますからね。

環境さえよければこれからだんだん歩く時間は増えてくるでしょう。

市長 今までの余暇の過ごし方は、一日だけだと疲れないようにということで単にテレビを見るとか昼寝をするとか、野球を観るとかで消極的な観賞するという余暇の過

し方が多かったんですが、これから余暇がもっと増えてきますと積極的に参加する余暇活動に移っていくと思うんです。そして我々はみんなが参加しやすいような環境を整えていくよう努力しなければいけないんじゃないかと思っています。

陳 舜 臣 氏

陳 文化ホールのことですが、私も講演でよく地方に行くことがあるんですが、地方にはびっくりするほど大きな文化ホールがあるんですね。ところがそれが十分に活用されてないんですよ。この町にはこんないい文化ホールがあ



るんだということを見せるだけで活用されていないケースが多いようです。そういうことにならないようにひとつお願いしたいものです。結局運営の問題でしょうけどね

市長 私もその経験があります。地方の町なんかでの市長会議にはよく文化ホールを使わせていただくんですが日程表をみますと、飛び飛びに催し物があるだけで、それをみてもったいない話だなあ、と思いましたよ(笑)

陳 地方の中小都市は地価が安いのか、それとも力を誇示するためか、何か飾り物といった感じが強いですね。まあ、建てるに越したことはないの、だんだん利用もされるんでしょうが。神戸の文化ホールの場合はあの周りに吸引力をもつてくるという一つの使命がありますからね。ですから建ててからだんだんと、というんでなしにかなりきめ細かくやっていただかないと(笑)

市長 まあ、神戸の場合は地方のホールのようにはならないと思います。といいますのも市の小ホールでも県の県民小劇場でもいっぱい、利用するのに数カ月も待たないといけないぐらいなんです。これはやはり人口に対して絶対量が足りないからなんです。

陳 神戸の市立の図書館はいいですね。親切ですし。

市長 図書の蔵書数においては日本でも有数のものです。陳 犬養道子さんが芦屋にいられた時よく利用されたらしくて感心しましたね。

市長 今年は図書館のブランチをもっとたくさんつくりたいと思っています。今まで区役所というのは戸籍をもらいに行ったり、税金を収めたりするだけのもののようにでしたが、これからはそこが区民の生活のセンター、文化のセンターとなるようなものにつくりあげていきたいと思っています。

陳 そうですね。気軽にドアを開けて入れるようなものであってほしいですね。

市長 一番最近にできたのは兵庫の区役所ですが、あそこには舞台をそなえた小さなホールもつくったんです。そういうふうなものを町役所を中心にして地域にかた

めてつくって、そこには老人憩いの家も図書館も体育館もホールもあり、みながそこへきて楽しめるようなものにしていきたいと思います。

★期待されるこれからの神戸と中国

陳 話は変わりますが、市長さんはこの前中国へ行ってこられたんですが、天津との姉妹都市提携は具体化しているんですか。

市長 ええ。周恩来首相にもお会いしているろと話をしてみましたので近いうちに実現するんではないかと思っています。

陳 まあ、向こうは何をするにしても時間をかけますからね。私なんかでも、はがゆいぐらいのことがありましたですから(笑)

市長 日本人みたいなせっかちな国民はちょっとないですよ。私らでもその場で決まないと満足できないタイプですから(笑)

陳 私、帰りに広州へ行きましてね、他の所ですとみな人民服を着てますので中国人、日本人、外国人はみな分かるんですが、広州は三〇何度でみな上衣を脱いでるでしょ。シャツだけだから外見上区別がつかないんです。それでホテルの上から見てみると、向こうの人が、「あれ日本人だよ」っていうんです。見るとバスが来ると走り出してるんですね。走ってる人は日本人だというわけです(笑)。「次バス来るんだから、中国人走らないよ」っていつてるんです(笑)

市長 中国に行つて感心したことは情報の速さということがありますね。これはたいしたものですよ。広州なんかで私達がしゃべったことはみな北京へ行ったら広州でどんな話をしたか知ってるんです。「非常に友好的なご挨拶をいただきました有難うございました」なんていわれてびっくりすることがありました(笑)

陳 情報は集めるんですが、決定は慎重に、慎重にという感じですね。

市長 向こうのベースにはまらないといかんですね。そうでもないイライラしてしまつて(笑) しかしのんびりしているようでみな働くことはよく働きますね。

陳 自力更生ということをスローガンにしていますけれども、今は独善的になつてはいけないということを盛んに行なつてゐるようですね。何でも自分でできるといった思い上った気持はいけないという教育をしてるようですよ。

そうなると日本との貿易面での関係がかなり深くでてくると思ふんですよ。

市長 私が元来中国との親善を深めたいと考えたのは港の問題があつたからなんです。戦前は神戸が大陸貿易の中核のようなもので、あの地域全体の貿易量をみたら船の出入でも一四〇〇隻ぐらいありますし、神戸港の貿易量の二十八%ぐらい占めてたんです。今は二・八%ぐらいなものです。それをもっと高めるといふことはできると思ふんです。向こうは今おっしゃつたように自力更生で、しかも軽工業品なんかは自国で生産しようといふ考え方ですね。しかし技術の導入とかプラント輸入といふのはやつておりますからそういうものは次第に増えていくでしょう。向こうも生活を高めようとして給料を一年間に10%ぐらい高めたいといふ考えのようです。今全体では平均給与が60円ぐらいでしょう。150円かけたら、九〇〇円ぐらいですよ。

陳 物価もありますけど、大学卒の初任給で50円ぐらいです。

市長 向こうの仲々手に入らない三種の神器というのはミシンと自転車とラジオですね。給与が上つてきますとそういうものの需要も増えてくるでしょうし、そうすると国内生産だけでは間に合わなくなつてくるでしょう。そうなるにつれて時間はかかりますが日本からの輸出といふことも期待できるでしょうね。

結局、根本的には生活に必要な必需品といふのは心配いらないようですが、工業製品とかぜいたく品を手に入

れるだけの資力がまだないということでしょう。

陳 そうですね。私は滞在中に「人民日報」の社説を見てましたそれに「日用品の品質の向上につとめよ」という社説がでました。人民日報の社説というのは国の最高方針ですから、生活面での豊かさをものともていうことなんでしょう。質的向上につとめるということですよ。

市長 食べ物豊富ですね。

陳 そうですね。食べ物は土地によつて違ふんですが僕を感じではどうも南と北がよかつたですね。中間の所はやはりどつちつかずですよ(笑)

市長 僕らやつぱり天津とか北京の食べ物の方が口に合ひましたね。南へ行きますとお米がポロポロなんです。

陳 あれはね、北京の近くだけ日本の米に近い米がとれるんです。

市長 北京や天津ではお米が美味しかったですよ。

陳 日本に近い米があつた一帯だけにあるんです。

市長 ああ、そうですね(笑)

陳 中国の料理はどんなぜいたくな料理でも伝統技術として伝えることになつてゐるんです。私聞いてみましたら料理のコンクールをいつも開くそうです。昔のやり方はそのまま残し、それに工夫を加えてコックのコンクールを定期的にやつてゐるようです。

市長 香港などへはよく豚を送つてゐるようですね。

陳 ええ、私もよく豚の貨物列車に会いました(笑)

市長 日本にもそのうち牛肉なんか来るようになるでしょうね。

陳 まあ、いずれにしても神戸と中国といふのは昔から深い関係がありますし、神戸にも約八千人ぐらいの華僑がいますし、昨年は市のご好意で健康保険が適用されることになり、私達としても感謝しております。今後とも中国との関係、そして在留華僑、これは友好の橋渡しのような存在ですからひとつよろしくお願いいたします。

経済ポケット ジャーナル



★第55回関西地区経済同友会合同懇話会開催

神戸経済同友会創立25周年を記念して「第55回関西地区経済同友会合同懇話会」が十一月十七日午後一時半から神戸オリエンタルホテル二階の大広間で開



オリエンタルホテルでの懇話会

とソニーの会長井深大氏が基調講演を行ない、そのあと両講師をかこんで熱心な話し合いが続けられた。日本経済はすでにGNP世界第二位という躍進を示し、豊かな社会を実現しつつあるが、一面通貨問題を始め、国際経済の緊張、公害などの環境問題、さらに国内経済の将来の見通しなど諸問題が山積し、流動的な国際政局と相まって重大な転回点に立っているだけに、この懇話会の開催は大きな意味をもったようである。

★本四架橋、今年度に三ルート同時着工と決まる

本州と四国を結ぶ本州四国連絡橋の神戸ー鳴門、児島ー坂出、尾道ー今治の三ルートについて本四連絡橋公団は工事実施のための調査を進めていたが、このほど同時着工の技術的見通しを得た。

それによると、神戸ー鳴門ルートは神戸市垂水区舞

子ー鳴門市松帆間の延長八・一キロ、六車線と四車線のほか、神戸市須磨区から鳴門市まで延長七・九キロの鉄道で海上部が二階建ての道路・鉄道併用橋になる。

主橋梁は長さ一、五八〇メートル、八八〇メートルの世界一のつり橋で建設される。

鉄道の場合は在来線で総重量千四百トン、新幹線は十六両編成の重さに耐えられる。

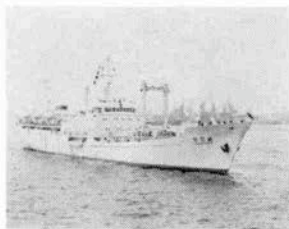
建設費は約五千八百二十億円。工期は十三年間、六十年完成の予定。

★神戸に初めて

北朝鮮の船が入港

十一月二十二日朝、朝鮮民主主義人民共和国の貨客船「万景峰号」(三、五七三ト・梁成哲船長ら七十四人乗り組み)が神戸港に初入港した。同船は日本と北朝鮮の間に就航している唯一の船で、これまで新潟ー

清津間を帰国者を乗せて結び、両国間の貴重な橋渡し役をつとめており、在日朝鮮総連の人たちや日韓関係者約二千五百人の盛大な歓迎を受けた。また第七次祖國訪問団として九月末から北朝鮮に一時帰国していた在日朝鮮人四十五人が同船で帰国し、民族衣装をつけた多勢の在日朝鮮人が「マンセイ、マンセイ」を合唱し祖國訪問から帰った人たちを出迎えた。



神戸に初入港した万景峰号

★KOBEオフィスレディ★



駿河 光子 (20歳)

株式会社 三星堂受付勤務

今月のO・Lは、お正月にふさわしく、着物姿がイカスのではないかなと思う？日本の女性であるところが彼女、中・高校と5年間テニスをやっていた、スポーツ・ウーマン。

実は彼女、鹿児島育ち、でも卒業後神戸に来て2年、今では神戸っ子よりも神戸が好きとか。尼崎市在住 鹿児島県立垂水高校卒

'73 謹賀新年

男の気品と格調、新しい年のスタート



O-SHIBATA

⑤ 柴田音吉洋服店

神戸・元町4丁目南 神戸 341-0693
大阪・高麗橋2丁目 大阪 231-2106

謹賀新年'73



KOBE  SHIRT

新しい春のよそおいに

神戸シャツ

神戸/大丸前 TEL 331-2168
東京/東急・渋谷 TEL 462-3433
東急日本橋 TEL 211-0511 <219>
広島/広島福屋IF TEL 47-6111 <440>